

2014年10月、東日本大震災から3年7ヶ月後の被災地、石巻、女川、閑上を訪問してきました。周囲からは、今更何をしに行くのか？と思われていたことと思います。

“今度は観光できてね。”大学時代に岩手県宮古市にボランティアに行った際、児童館の先生から言われた言葉です。私はこの言葉をきっかけにこのツアーへの参加を希望しました。震災時、大学生だった私は何かできないかという思いはありましたが、なかなか行動に移せませんでした。被災地で何が必要なかわからない。だったら今自分にできることをしよう。そう思い、学生オフィスに相談に行き、大学のサポートのもと、地域貢献をしているサークルを集めて被災地に行きました。地域の子ども達に身近なものを使って科学実験を教えているライフサイエンス研究会に所属していた私は、被災地の子どもたちと交流し、特別なことが出来なくても自分達の普段の活動がボランティアになるんだということを実感しました。このときにもう一つ感じたことがありました。小学校や児童館の子ども達、保護者の方々と実際に話をしていると伝わってくるのは、皆さん地元が大好きだということでした。新鮮なお魚を食べられるお店や景色のきれいな場所をたくさん教えてくださいました。この時、被災地と呼ばれている場所は皆さんの自慢の故郷なのだということに気がきました。そして、絶対にまた観光に来よう、同じお金を使うなら少しでも被災地に役立つような使い方をしようと思いました。しかし、社会人になり徳島県に配属となった私はなかなか東北に行く機会を作れずいました。そんな中、大学が企画しているこの東北応援ツアーを知り応募させて頂きました。

東北応援ツアーでは被災地の観光がメインでスケジュールが組まれていました。その中で一番印象に残っているのは大型観光バスで実際に被災地を走り、車窓から被災地を見てまわった時のことです。被災された校友の方のお話を聞きながら、生い茂る雑草や当時のまま横倒しになっている建物を見ました。3分・5分の余震が当たり前のように続いたことや、女川では友人12人に1人の割合で行方不明となったという現状を知り、胸が詰まりました。また、海辺の柱や壁には印がつけられており、津波の到達地点を記してありましたが、どれも信じられなかったです。想像も出来ませんでした。私は観光バスから見下ろす形で被災地やそこに住む人たちを撮影しました。不謹慎な気がしましたが、この現状を戻ってから伝えるためにも、自分自身の記憶にとどめるためにも、残しておきたいと思い控えめに撮影していました。そんな時、私の目に飛び込んできたのは観光バスに向かってお辞儀をする方、手を振って下さる方々の姿でした。…色んな複雑な想いや葛藤があったはずなのに、被災地の方々は私たちを歓迎してくれているんだと気がきました。行くだけでいい。現地を見るだけでいい。観光して、お土産を買って、美味しいものを食べて、それだけで少くくは復興のお役にたてるんだということ、実感出来た出来事でした。

正直、石巻も女川も閑上も…本当に3年半も経ったのか？と思うほど復興は進んでいませんでした。見渡す限りの雑草、持ち主が亡くなってしまったために半壊のままの建物…3年半以上経った今でも閑上では毎日ボランティアによる行方不明者の捜索が行われているようで、まだまだ復興が難しい現実がありました。しかし未来に向かって変わりつつある現状もありました。前に進んでいる皆さんがいました。震災後立ち直ってきた企業。立命館大学の卒業生の方々の会社が色んな絶望を乗り越えてきたお話を聞かせて頂きました。新しい町づくりを計画し、生まれ変わろうとしている町。一から自分たちで作れるんだと、今までよりもっと良い町にするんだと力強く話してくださいました。皆さん未来に向けて一步一步前に進んでいました。そして、次に訪れた時にはどんな町が作り上げられているのか、とても楽しみにになりました。

震災から年月が経ち、今更何ができるんだと思う方々は多いと思います。何かしたくても出来ていないという人もたくさんいると思います。だけど今しか見れない景色があります。今しか出来ない支援があります。震災から3年半経っても未だプレハブの仮

設住宅で生活をされている方は9万人以上いらっしゃるそうです。観光に行くだけでも、震災を思い出すだけでもいい。たいそうなことは出来なくても、一人ひとりの意識が復興には必要なのだと感じました。自分も楽しんで被災地も盛り上がればこんなに素敵なことはないと思います。これから先、たくさんの方が被災地のことを思い出して、復興に励む被災地を訪れて欲しいです。私もまた、生まれ変わった町に観光に行こうと思います。